

令和6年度市川市社会福祉審議会第1回市川市高齢者福祉専門分科会 会議録

1. 開催日時

令和6年10月9日（水）14時00分～15時30分

2. 開催場所

市役所第1庁舎 5階 第2委員会室

3. 出席者

【委員】

会 長 山下委員

副会長 松尾委員

委 員 佐々木委員、岩松委員、久保田委員、松丸委員、坪井委員

(欠席者1名)

【市川市】

奥野地域包括支援課長、尾瀬介護保険課長ほか

4. 傍聴者 0名

5. 議事

(1) 高齢者施策の中期的なあり方について

6. 配付資料

・資料 高齢者施策の中期的なあり方について

・当日配布資料 介護予防・日常生活支援総合事業の充実に向けた国の方針等拡大図

7. 議事録

(14時00分開会)

発 言 者	発 言 内 容
山下会長	<p>ただいまより、令和6年度 市川市社会福祉審議会 第1回 高齢者福祉専門分科会を開催します。</p> <p>議題(1)「高齢者施策の中期的なあり方について」事務局より説明願います。</p>
地域包括支援課長	<p>(資料 高齢者施策の中期的なあり方について に基づき 概要 P.3～6を説明)</p>
山下会長	<p>事務局より説明がありました。委員の皆様から、ご質問やご意見ございますか。</p> <p>(質問・意見なし)</p>
山下会長	<p>それでは、視点1「高齢期の医療・介護・生活を支えるサービスの充実」について、事務局より説明をお願いします。</p>
地域包括支援課長	<p>(資料 高齢者施策の中期的なあり方について に基づき 視点1 P.6～14を説明)</p>
山下会長	<p>視点1について、ご意見ありますでしょうか。</p>
松丸委員	<p>地域の見守り体制の拡大、強化と書かれていますが、見守り体制は隙間だらけだと感じています。小学生に声をかけても「危ないから」と逃げってしまうようなこともある中で、あいさつ運動などにより、お互いに距離感をもって知ることが大事だと思います。距離感は人によって違いますが、顔見知りの基盤づくりが重要と考えています。</p>
岩松委員	<p>青写真の政策方針はその通りだと思いますが、実効性を高める必要があります。住民が元気なうちから地域と関わりを持っていくには、地縁意識を高める必要があります、検討チームを立ち上げて取り組んではどうでしょうか。私のところでは2年程前から、フレイル予防の健康体操に取り組んでいますが、参加者へのアンケートから3つのメリットが多く見られました。一つ目は、友達ができた。二つ目は、歩くことを日常に取り入れられている。三つ目は、家の中にいるときも明るくなった、ということです。</p>

<p>岩松委員</p>	<p>こうした効果をみると、各地域に居場所を作ることは重要と考えられます。本市は、コミュニティソーシャルワーカーの制度は始まっており、地域の困りごとには対応しますが、地域の交わりを作るまでには至っていないと思います。地縁意識を高めるには、地域のサークルを作ったりして居場所を増やし、市と住民と連携していくことが必要です。地域の課題解決に向け、住民の理解と協力が得られる関係づくりの支援をぜひお願いしたいです。</p> <p>医療、介護のお世話になる前に、予防的な取り組みは重要です。ある自治体で実施した調査によると、他人のために行動するのは1割、全くの無関心は2割、残りの7割は“様子見”だそうです。こうした結果からも、呼びかけることに意味がないとは言えません。住民とつながるシステムを考えていただくこともよろしくお願ひいたします。</p>
<p>坪井委員</p>	<p>生活を支えるサービスということ言えば、高齢者を訪問した際、「後見人を依頼するとお金がかかります」「ではやめます」となることがあります。親族など身近な人でも後見人になれると聞いたことがありますが、費用が抑えられるような成年後見制度があると、年金生活者も頼みやすいので良いと思います。もう一つは、成年後見人を依頼すると、気に入らなくても変更できないと聞いていますが、もう少し改善されないかと感じます。</p>
<p>松尾副会長</p>	<p>後見人に関する話は、視点2のところでお話したいと思います。視点1については、地域の居場所の話題が出ていますが、「足の確保」はずっと議論されてきて、近年、移動販売を導入したり、「チケット75」の事業もありますが、今後、さらに核家族や単身世帯が増えると考えられると、事業に関する今後の検証も踏まえた上で、都内で行っているような無料のパスや、独居の人に対しては民生委員が訪問して声かけをするなど、方策は様々あると思われませんが、ワンステップ進んでいく必要があると考えます。</p> <p>また、「食の確保」という観点で、こども食堂で子どもだけでなく親子や高齢者を受け入れているところもあると思いますが、さらに強化して、「コミュニティ食堂」化してはどうかと思います。</p> <p>もう一点、互助活動への人的支援について、私どもは市から受託し、コミュニティソーシャルワーカーを4人配置し、東西南北の圏域で日々奔走していますが、さらなる充実が必要と考えており、もう少し強化していきたいと考えています。</p>

佐々木委員	<p>介護の需要が増えている反面、介護に携わる介護者の労働人口がかなり少ないです。そこで、岩松委員もご指摘の通り、大事なのは予防だと考えています。健康寿命の延伸は非常に重要なキーワードで、健康寿命を延伸すれば要介護者が減少し、介護費用の伸びも抑えられます。医療の立場からは、今後フレイル対策として骨密度の測定が検診で予定されており、医師会としては、認知症や歯周病の対策を行う予定です。これまでは、メタボから脳梗塞や心筋梗塞に至ることが強調されてきましたが、今現在、要介護になる方は、認知症や骨折など身体能力の低下が多く、その対策やそこに至らないようにする予防は重要です。</p> <p>見守りについては、自治会や地域の方が進めていただき、我々医療の立場では、介護予防やフレイルの対策を進めたいと考えています。</p>
久保田委員	<p>我々シルバー人材センターの立場から現在感じている問題点としては、働く方も高齢者ですが、発注する方も高齢になってきて、就業を提供する立場、そして費用を頂くということに対する理解がいただけない方もあり、システムがうまく機能していかないという課題があります。</p> <p>また、健康寿命の延伸について、「きょういく（今日、行くところがある）」と「きょうよう（今日、用事がある）」は重要ですが、仕事は、予定やスケジュールを組んでいく、体を動かすということで、健康保持につながるというアピールに、ここ5年くらい力を入れているところです。</p>
山下会長	<p>皆様のご意見を伺うと、「高齢期の医療・介護を支えるサービスの充実」というテーマに加え、それぞれが役割をもって自立した生活を営んでいくことも含めた、サービスの手前にある自己管理的なところと、もう一つは、地域の人と関係性を作っていくこと、これらを含めたうえで高齢期の生活が成り立っていくということであり、サービスを計画するだけで審議会や計画は語れない、というご指摘があったものと思われます。事務局の資料では、13、14 ページの記載でほぼ網羅されていますが、さらに移動や食の問題も加え、これらをサービスとして充実させるのか、あるいは、地域づくりや一人一人が生活の仕方を学んだり高齢期の生き方を考えていきつつ必要なサービスは保証される、という書きぶりを意識することが国の施策に留まらない地域デザインになる気がします。</p> <p>こうしたテーマを「介護保険事業計画」や「地域福祉計画」で受け止めて、岩松委員の言われた「7割の方」にどうやって働きかけていくか、メッセージ性を出していくかということが、これからの行政計画においては必要かもしれません。メッセージの出し方は、皆さんとまた議</p>

山下会長	<p>論していきたいと思いますが、10ページの経済産業省が作成した図は“サービスのみ”で語っているので、これを参考にしつつも、もう少し地域活動や自身の取組みとリンクさせられるようにしていくことが、今回の諮問テーマである「向こう10年を考える」うえでは重要ではないかと思います。</p> <p>次に、視点2)「自身の意思を尊重した終活と最期への備え」について事務局より説明願います。</p>
地域包括支援課長	<p>(資料 高齢者施策の中期的なあり方について に基づき 視点2 P.15~24 を説明)</p>
山下会長	<p>視点2について、ご意見ありますでしょうか。</p>
松尾副会長	<p>先ほどの坪井委員のご指摘については、成年後見制度の利用支援事業があり、申し立て費用や報酬の助成が可能ですが、市川市は非課税世帯に限定しています。そこをもう少し緩和するのか、制度の狭間で利用できない方は、必ず制度の線引きの中で出てきており、これからも高齢者の増加に伴って狭間の方も増えていくと思われます。社協としても、法人後見で、無報酬で担っている部分もありますが、人的、費用的負担の増大を考えると、今後どのように担っていくことが望ましいのか、議論が必要ではないかと思っています。</p>
岩松委員	<p>直接結び付くかわかりませんが、成年後見制度のことにに関して、地域の方がそうした傾向に陥った際、身近で付き合いがあったご友人が買い物のお世話等もする中で、次第に金銭管理にも対応していましたが、高齢者サポートセンターに相談し、それを見直した方が良いということで、社協にも連絡をとりながら対応したことがあります。この時に、支援に携わっていた地域の当事者の方が、そうした支援をご存じではありませんでした。地区に相談窓口を設けるということになっていますが、そうした活動の対象になる方や、もちろん、身内の方にも知られていなかったです。もう少し、生活の問題も含めて、成年後見制度の利用により、こうした道筋を支援できるということを、PRしたほうが良いと思いました。</p>
坪井委員	<p>資料21ページの赤いマークが示す課題について、実際に困っている人もおられますし、青いマークが示す課題について、こういう手続きにおいて信頼できる人がいないとか、独身で身内がないという方も増え</p>

坪井委員	<p>ると思われます。こうしたことを本人が相談でき、安心できる場所があると良いと思います。</p>
松丸委員	<p>私が調べたところでは、神奈川県横須賀市の「わたしの終活登録」という事業があり、横須賀市の地域福祉課、終活支援担当で実施しています。様々な項目を相談できて、エンディングノートの保管場所や、親族の連絡先、葬儀・墓のことなど、自分で選べる項目があり、それを行政に事前に言うておくこともできるという仕組みなので、参考にしていたらと思います。そうしたものと、市に登録しておける安心感は出ると思います。ただ、自分自身のエンディングノートは、なかなか元気な時には考えられないので、そこが、周知していく際も課題と考えられます。</p>
坪井委員	<p>松丸委員の言われた事業は、私も、おそらくテレビで見た記憶があります。そうした仕組みが、市川市にもあると良いと思いました。</p>
山下会長	<p>これは避けられないテーマだと思いますが、行政機関の中で「自分の意思を尊重した終活と最期の備え」をどう建てつけるかは、論点としてあると思います。20 ページの「頼れる親族の不在が懸念される」のは、高齢者だけでなく若者にも当てはまってくる話です。では、親族に頼っていたのはどういう部分だったかということ、19 ページの施設や病院といった社会的な機関で入所・入居が断られる実態があるということ、これは、保証人がいないと契約できないという住居の問題も同様ですが、社会の仕組み自体が親族をベースとした受け入れ体制になっていた中で、自分でどうやって生きていくかということと、ミックスしていく話となります。成年後見制度は開始から 25 年たっていますが、あまり活用が進んでいないことも、社会として受け止める体制がまだ整っていない中で代理人制度があっても意味があるのか、という実態もあるのだと思います。</p> <p>重要なのは、あらかじめ想定して「自分で決めること」の範囲はどこまでなのかということや、それを誰に頼むのかとか、誰が気づいてくれるのかといった、関係の中で生活が成り立っていくことと、一方で、それを引き受ける機関の体制がそもそもあるのかという、両者のミックスによってようやく最後の備えが安心できるという中で、市民が備えただけでは安心できないという状況に対し、これから 10 年で市川市が何を作っていくか、ということになると思います。</p> <p>それを、個別のテーマを絞って進めていく方法もあります。例えば、24 ページの ACP について、老人ホーム等で“もしもの時”にどのような</p>

<p>山下会長</p>	<p>処置をするか、どう進めていくかということ、本人が事前に親族と話しあっている、最終的に配偶者が本人を目の前にして施設で看取ることをすっ飛ばして救急搬送を依頼するようなケースも当然ありますが、それはそれで、配偶者が決めたという実態を受け止めつつ、ご本人が決めたことをどう活かすかという倫理的な課題もあります。一方で、身寄りがない方の場合は、あらかじめ本人が決めていけば、親族がいるよりむしろ進めやすいということもありますので、市川市の実態や背景をこの審議会でも受け止めながら、しっかり作っていくという方針を立てるということだと思います。</p> <p>そうすると、「自分でどういう備えをしていきたい」ということを考えるような市民グループという考え方も基盤にあると思われま。先ほどの後見人の話でも、託す人が信頼する関係性まで至っていないという話もあり、行政が後見の仕組みを用意するのかとか、社会福祉協議会が市民を代表して後見活動をするという発想だけではなく、市民同士がグループを作って、顔の見える関係性の中で、成年後見とか死後の手続きや、空き家や財産の処分について、市民の中で考えていくような文化を作っていないと、結局、先ほどの視点1と同様“サービスを作れ”という計画になってしまいますが、本当にサービスだけで成り立つのかということ、今は意識しなくてはいけないのだろうと思います。</p> <p>テーマとしては取り上げつつ、ではどのように進めていくかということ、22 ページの市の取組みとして、普及啓発とそれに取り組む方のサポートの2点が挙げられていますが、一方で、23 ページの介護サービスや施設利用が困難な状態であるということや、本人の意思決定ができていないことや、ACPを知らない方もいると思われま。そうしたことも含め、また「終活」という言葉はやや使い古されているので、市川市民が「終活」ということを受け入れられるかも含めて、この10年間で、一人暮らしが激増していく中での、高齢期の中期的な支援ということを考えていかなければと思います。</p> <p>つまりここで言いたいのは、介護サービスや福祉サービスではなく、“手続き的な給付”が必要ということで、それをどのように生活支援に組み込んでいくかということだと思います。</p> <p>それでは、視点3)「年齢や心身の状況に関わらず、地域とのつながりや役割を持てるようにする」について事務局より説明願います。</p>
<p>地域包括支援課長</p>	<p>(資料 高齢者施策の中期的なあり方について に基づき 視点3 P.25~36 を説明)</p>

山下会長	視点3について、ご意見いただきたいと思います。
久保田委員	<p>我々シルバー人材センターは大前提として、働く機会を提供することにより、高齢者の社会参加を促進するとともに、健康維持と生きがいを確保して、地域社会の福祉の向上に寄与するため設立された団体です。登録している方たちは、こちらから紹介された仕事をする事で収入を得るほかに、生きがいの充実や社会参加を通じて、地域の活性化に貢献していくという形になっています。このような形で活動していますが、仕事をするということについては、前段でご説明があった通り、馴染みのある組織で仕事をする以外の社会参加や生きがいづくりにつながるような居場所づくりが必要ではないか、と我々も認識しています。</p> <p>過去には、シルバー人材センターの中でのサークル活動やボランティア組織があり、活動していた時期がありましたが、組織が変わったり、新型コロナ感染症などの社会情勢の変化があり、下火になっているところです。今後は、会員や社会のニーズなどを調査したうえで、我々シルバー人材センターならではの居場所づくりも必要ではないかと考えています。</p>
岩松委員	<p>地域とつながりや役割を持てるようにするというテーマは重要ですが、資料に書かれたことだけでは、実効性がないと思います。私の考えでは、健康づくりを支援する、行政が住民と一緒にやって行こうような、支援する制度がなければ機能しません。ソーシャルキャピタルの構築が重要ですが、生活者と有給者とが、地域の問題について連携をとってひとつの手引書を作る、起きている事例を課題にして、地域の資源に結び付く課題を把握して、それを実際にどのように進めていったらいいかを相談する一つのチームだと思いますが、そこに、行政の有給職の担当者がいないと、地域のグループもできず進みません。そうしたことを手掛けている市もありますが、地域で日々起きていることに対して、本市の行政の支援体制は、ほとんどありません。行政が設定している居場所に「来てください」という方式では、移動手段がないのです。「自分で行ってください」と言っても、なかなか行かないのです。住んでいる近くで、いろいろな場所を見つけて、住民主体で場所を立ち上げてもらっている。そうしたところに専門家を呼んで、ということは少しずつ進めています。そうしたことに対して何の支援もないと感じています。地域とつながりや役割を持てるようにするには、そこに一歩踏み込まないといけないのではないかと思います。</p> <p>住民主体の活動についても、健康をテーマにして呼び掛けています。高齢者クラブについての特集号を先週土曜日の広報に掲載しましたが、</p>

岩松委員	<p>「どうしたら参加できるか」とか「掲載されている団体に入りたい」とか様々な反応を受けています。このように、何らかの呼びかけをすれば、ふれあいも含めて住民が参加していただくきっかけが出てくると思います。</p> <p>とにかく、地縁活動にもつながる居場所では、健康や生きがいに関することに非常に興味があります。市川市高齢者クラブ連合会で調査したところ、一番目は災害に対する要望、二番目は健康に対する要望となっています。自治（町）会 226 団体の中で、防災や防犯の活動は多いですが、健康づくりをテーマにしている団体は少ないと思います。基本業務があり、福祉に関わることはなかなか難しいとは思われますが、住民主体で起きてくることだと思いますので、活動したところに対して、もう少しバックアップしてほしいと思います。</p>
坪井委員	<p>認知症の人の意見発信とありますが、ご主人が認知症で、他所からごみを持ってきてしまい、奥さんが捨てようとしても捨てさせないので、そうした方を見かけて何かお手伝いできるかと思ったら「関わらないでください」と言われてしまいました。私たち民生委員は、そういう方たちにどのような支援をしたら良いか、自分たちで抱えていて外に出さないという方にどうすればいいか、考えさせられた事例でした。</p>
松尾副会長	<p>坪井委員のお話にも関係しますが、社協も地域ケアシステム推進の事業で地区社協の 15 の拠点において活動し、様々なイベントを実施しております。その中で、本当に孤立している方が参加できているか、人とのつながりを好まない方を引き出せているかという問いは持っていないと思っています。</p> <p>後継者不足については、どの会議や団体でも言われていることであり、人が来なくて定員割れのところも多いと思われます。シルバー人材センター等との関係もありますが、完全無償のボランティアとともに、ある程度の収入の保証をする部分も必要ではないか、これだけ後継者がいない、人手不足と言われているので、考えていかなければならないと思っています。</p>
松丸委員	<p>地域とのつながりを持たないというところで、幼稚園児や小学生を育てている若いお母さんや、土日は家で休んでいる男性を地域に引っ張り出すにはどうすればいいか考えました。子どもが通園している間で、何曜日ということを決めずに、単発で短時間なら、これらの方も代わりにできる、そうした「仕事をシェアするようなシステム」があれば、地域や自治体も「これだけ手伝ってください」という依頼をすることで、手</p>

<p>松丸委員</p>	<p>伝ってもらえるのではないかと考えました。</p> <p>また、松尾委員がおっしゃったように、多世代が交流する場は本当に少なく、特に 65 歳以上の男性は家から出ず孤立する方が多く、孤立死に結び付く方も多いので、そういう人が出てくるにはと考えると、美味しい食べ物があれば出てくるのではないかと、例えば、子ども食堂の場所を借りた「高齢食堂」に、少し親しい友人から誘われたり、縁がある方からの声かけがあれば、男性が出てきてくれるのはと思いました。</p> <p>また、これだと決めつけるのではなく様々な活用ができる居場所づくりや、いつも日にちや時間を決めているのではなく、フレックスにできるような活動があれば、手伝ってくれる方が地域にも出てくるのではないかと考えたところです。</p>
<p>山下会長</p>	<p>ありがとうございます。時間がきましたので整理しますと、本日は、3つの視点で意見交換をしました。視点1については、「高齢期の医療・介護・生活を支えるサービスの充実」ですが、加えて、住民主体の活動を促進することで、市川市の生活支援体制、医療介護を含めたものが整うという方向を作っていくということです。</p> <p>視点2は、「自身の意思を尊重した終活と最期への備え」という論点で話を進めてきましたが、方法論としては、この視点の言葉になりますが、実態としては、手続き支援を確保する、体制を作っていくという、やや抽象度を上げた議論にしてみました。実態としては、備えというよりも手続き支援という体制を確保していく時期に、これから入っていくのではないかと考えられます。</p> <p>視点3は、「年齢や心身の状況に関わらず、地域とのつながりや役割を持てる」といった意見交換をしてきましたが、資料は高齢社会白書など国のデータなので、市川市の実態がどうなっているかをこれから考えていかなければいけないということが、27ページの「仕事に生きがいや健康づくり求めているか」や、その手前の「収入を伴う仕事をしたいか」など、いくつかありました。私には、高齢の方でも収入を意識した回答も目立っているように見えて、特に女性の高齢期、75歳以上でも目立っていると思いましたので、そうした部分でも、ボランティア活動や地域活動にしても、全くの無報酬ではない地域活動の在り方を提案していくことも含めて、それがサービスや担い手不足を解消するという視点ではなくて、岩松委員が“ソーシャルキャピタル”という言葉が使われましたが、市川市の地域社会の中に、関係性という資源を作るという話であり、視点の1番目がサービスや住民主体の活動、2番目が手続き的な支援で生活が整えられること、3番目が関係性といったものが市川市の資源として重要だということ、これからの計画で打ち出していくこ</p>

山下会長	<p>とが、今回の諮問において重要な意見として、皆様から寄せられたと思います。</p> <p>かなり抽象度を上げてしまっているので、具体的に何をどうするかということは、それぞれのセクションや業界で考えることが、また新たなテーマとして出てきますが、その時に、関係者の声と市民の声、市川市のデータとして整備していくことにより、視点の仮説が妥当であったということが裏付けられていくと思いますので、そうしたことも含めて答申の案を出していただきながら、向こう10年に向けての市川市の生活支援体制、医療介護の連携、生活支援における市民参加、といったことが充実されていくという方向が宜しいかと思えます。</p> <p>ご意見ございますか。</p> <p style="text-align: center;">（意見なし）</p>
山下会長	<p>それでは、他にご意見等ないようでしたら、令和6年度市川市社会福祉審議会第1回高齢者福祉専門分科会を終了いたします。</p>

（15時30分閉会）

市川市社会福祉審議会高齢者福祉専門分科会
会長 山下 興一郎